



19
「壊」

自転車が悪れた。

正確には『タイヤの空気が抜けたまま放置されている』状態で、駐輪場に申し訳なさそうに佇んでいる。あったものがない、というのは案外不便なもので、さすがに重い腰をあげて自転車屋さんに持っていくた。

診てもらった結果、パンクだけでは済まないらしく、「修理するなら一万円くらいかりますね」と言われた。その時、ぷしゅう、と空気が抜けるような音がした。実際に空気が抜けたのか、僕の気持ちのほうだったのかはわからない。ただ、これまで修理してもらった際は1500円程度で済んでいたので、予想外の返答だったことは認めざるを得ない。「買い替えたほうが早いかもしれませんよ」と店主の声が続いた。

なんとなく決心がつかず、一旦そのまま持ち帰ることにした。帰り道、とぼとぼ自転車を押す僕の横を、小学生の集団が自転車を立ち漕ぎしながら猛スピードで駆け抜けていく。あんなに速く移動できたなら、さぞ楽しいだろう。

修理も買い替えもせずに帰ってきた。さながら定位置とあった具合に、自転車はいつもの駐輪場で休んでいる。

思えばこの『相棒』といろんな場所に行った。稽古場、オーデション会場、トレーニングジム。電動式でもないのに、区をいくつもまたぐ遠くの公園に行ったりもした。あの頃は体力が有り余っていたんだ、することがなくて。

自転車がないので歩くしかない。そんな時に限ってこの急激な酷暑だ。梅雨はいたいどこに？柔軟剤の匂いがするハンカチでひたいを拭いながら、帰り道は絶対に歩かないと心に決めた。

自転車が壊れたとわかったとき、実は頭に思い浮かんだものがあった。『LULUP^{ループ}』に代表される、コンビニやマシンの駐輪場などに置いてあるレンタルの電動キックボード。これまでは自転車があるので選択肢から外れていたのだが、あれに乗ってみよう！

いざ帰り道、乗ると決めていたので事前準備は万端だ。本来、電車＋歩きで移動する距離のところを、電動キックボード一本で帰ってみる。新たなチャレンジに、すこし胸が高鳴る。一步目を蹴り出して軽く助走をつけ、アクセルレバーを右手の親指で押す。「は、はやい！笑」。先日
の立ち漕ぎの小学生たちより速い。自分自身、小学生の頃にさんざんキックボードを乗り回していたので操作は体に染み付いている。当時と違うのは、スピード感と景色だ。東京の名所が続ぎ、きらきらとビルが美しい。まるで夜風になったかのように、またたく間に家に着いてしまった。この瞬間、僕は完全に自転車の存在を忘れていた。

この手の電動キックボードのサービスが登場してすでに数年。普段から利用する方からしたものすごく今更感のある話だろう。でも初めて利用した自分からすると、30分にも満たない初ライドだったがとても楽しく、新鮮だった。

た。同時に、これまでこの乗り物にどこか偏見を持っていた自分に気がついた。危ない乗り方をする人がいるから、危ない乗り物なんじゃないかとちょっと思ってしまった。実際に乗ってみたら全然そんなことなかった。ちゃんと乗れば、気分爽快でめっちゃ便利！

自転車が壊れたのは残念だ。でも、結果的に新しいことにチャレンジでき、知らない感覚を味わえたのだから、これはこれで悪くない出来事だったのかもしれない今は思えている。

自転車屋さんの店先で「一万円です」と言われたとき、自転車との距離が遠のいてしまった。最後に乗った日も、これがラストだなんて思いもしなかった。限界が近づいていたはずなのに、それでもいつもパンパンに空気をはって頑張ってくれていたんだ。あの日すぐに買い換えようと思えなかったのは、他でもなく、愛着によるものだ。

しゅるしゅると空気が抜けていく音は、きつと『相棒』との別れを告げる音だった。